

イザヤ書30-31章「神の民が世に拠り頼む時」

1A 世の知恵 30

1B 主に拠らない計画 1-17

1C 役に立たないエジプト 1-7

2C 預言に反抗する民 8-14

3C 弱くされる民 15-17

2B 恵みの注ぎを待つ方 18-24

3B 敵に対する主の復讐 25-33

2A 世の力 31

1B 速やかに助ける万軍の主 1-5

2B 恵みによる悔い改め 6-9

本文

イザヤ書 30 章を開いてください。今晚は、30-31 章を見ていきます。私たちが今、読んでいるところは、28 章から始まる、ユダの中にある霊的問題に対して語っている部分です。

北イスラエルについては、まるで主を度外視して、祭司や預言者たちでさえが、世の楽しみにふけているのですが、ユダはそうした姿を嘲ていながらにして、実は、世との妥協がありました。密かにエジプトと同盟を結び、アッシリアの進軍に援軍を期待していたのです。それが死の契約であり、まやかしの契約であることを、イザヤは預言しました。それが 28 章で、29 章では、宗教的に熱心ですが、みことばに対する理解が、霊的に眠っている問題を取り上げています。世に対して妥協している部分がありながら、信仰的にはしっかりしている体裁を保っているという問題です。けれども、主は、そうした彼らの欠けにもかかわらず、彼らを救ってくださいます。

30 章と 31 章も、その続きです。エジプトの知恵に拠り頼み、またその戦力に拠り頼んでいる姿を預言しています。その背景になる歴史的記述を読みましょう。列王記第二 18 章 13 節からです。「18:13-16 ヒゼキヤ王の第十四年に、アッシリアの王センナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々に攻め上り、これを取った。14 ユダの王ヒゼキヤは、ラキシュのアッシリアの王のところへ人を遣わして言った。「私は過ちを犯しました。私のところから引き揚げてください。あなたが私に課せられるものは何でも負いますから。」そこで、アッシリアの王はユダの王ヒゼキヤに、銀三百タラントと金三十タラントを要求した。15 ヒゼキヤは、【主】の宮と王宮の宝物倉にある銀をすべて渡した。16 そのとき、ユダの王ヒゼキヤは、自分が【主】の神殿の扉と柱に張り付けた金を？ぎ取り、これをアッシリアの王に渡した。」

主に拠り頼むことを民に教えていたヒゼキヤですが、今、ユダの町々が次々と取られているのを目の当たりにして、貢物を急いで持っていつている姿です。そして、エルサレムが包囲されました。ラブ・シャケがやってきて、ヒゼキヤの弱みをつかんで、次のように責め立てています。「Ⅱ列王 18:19-21 ラブ・シャケは彼らに言った。「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリアの王がこう言っておられる。『いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか。口先だけのことばが、戦略であり戦力だというのか。今おまえは、だれに拠り頼んでいるのか。私に反逆しているが。今おまえは、あの傷んだ葦の杖、エジプトに拠り頼んでいるが、それは、それに寄りかかる者の手を刺し貫くだけだ。エジプトの王ファラオは、すべて彼に拠り頼む者にそうするのだ。』」すでに、エジプトにより頼んでいたことが、アッシリアに知られていたのです。そのためにアッシリアの攻撃に拍車がかかり、アッシリアはユダの町々を次々と攻略していたのです。そして、エルサレムも包囲してしまいました。

ヒゼキヤが犯してしまった過ちは、単にエジプトに頼ったということではありません。主の民として、主にだけより頼むことを信じ、そのように教えていたのにも関わらず、おそらく側近の助言に屈したのでしょう、エジプトに使いを送ったということなのです。この過ちは、神の民にはいつもつきものです。主により頼むと言いながら、実は世の知恵に頼っている。実は、世の力に頼っているという問題です。例えば、お医者さんにかかるとしても、それ自体はいいことだとしても、そこに主の癒しを願い求めることに取って替えて、それを行ったら、どうなるでしょうか？それ自体に問題はなくとも、主の民として、主に拠り頼むことに取って替って行っている時、それは大きな罫となるのだという警告を、私たちはここ 30 章と 31 章で読むことができます。

1A 世の知恵 30

1B 主に拠らない計画 1-17

1C 役に立たないエジプト 1-7

¹「わざわざだ、頑なな子ら。——主のことば—— 彼らははかりごとをめぐらす、わたしによらず、同盟を結ぶが、わたしの霊によらず、罪に罪を増し加えるばかりだ。² 彼らはエジプトに下って行こうとするが、わたしの指示を仰がない。ファラオの保護のもとに身を避け、エジプトの陰に隠れようとする。

計りごとを巡らすとありますが、私たちが計画を立てることについては、何ら問題ありません。そうではなく、主に求めて、主にあってはかりごとを巡らしているか？と言ったら、そうではないのが問題であります。それは、肉により頼むことであり、主の御霊によるものではないからです。

計りごとは、主のものです。「箴言 8:14 計りごとと、確かな知恵とは、わたしにある、わたしには悟りがあり、わたしには力がある。(口語訳)」そして、その知恵は御霊によって与えられます。コリント第一 14 章には、「知恵のことば」という御霊の賜物が出てきます。イザヤの預言には、キリストに主の霊が留まっていて、それは知恵の霊であると教えています。「11:2 その上に【主】の霊が

とどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。」

立ち止まって、主により頼み、祈り、主から知恵をいただくということをしなければ、そのまま罪を犯してしまうことになります。罪に罪を増し加えると言っていますが、その原因は、2 節、ファラオの保護、エジプトの陰に隠れようとしているからです。影とは、暑い日差しの中で自分を守ってくれるものとしての表現です。主が守ってくださるという信頼から離れると、罪を一つ犯して、その罪からくる窮地を補うために、さらに他の罪を犯してしまうという悪循環に陥ってしまいます。

³ しかし、ファラオの保護に頼ることは あなたがたの恥となり、エジプトの陰に身を隠すことは 恥辱となる。⁴ その首長たちがツォアンにいても、その使者たちがハネスに着いても、⁵ 彼らはみな辱められる。自分たちにとって役に立たない民のゆえに。その民は彼らの助けとならず、役にも立たない。かえって恥となり、そしりの的となる。」

「ツォアン」は、エジプトの北部にある町で学問に優れたところとして有名でした。ハネスは、今のカイロに近いところ。そこに行けばアッシリアに対抗できる知恵が得られると思って、彼らは使者をそこに送ったのです。しかし、全く役に立ちません。聖書の歴史の中では、アブラハムが、飢饉があったのでエジプトに下ったのにあったように、どうしても主への信頼の代わりに、より頼みたく誘惑があるのです。しかし、そこは役に立たないのです。

安直な世の知恵に頼ることは大きな対価を支払うことになります。役に立たなくて、恥となります。聖書の「恥」というのは、恥ずかしいというよりも、「期待通りにならなくて失望する」という意味合いが強い。「私は福音を恥としません。(ローマ 1:16)」とパウロは言いましたが、それは「裏切られない」という意味合いが強い。それに頼っても失望しない、という意味です。

⁶ ネゲブの獣についての宣告。「苦難と苦悩の地を通り、雌獅子や雄獅子、まむしや、飛び回る燃える蛇のいるところを通り、彼らはその財宝をろばの背に載せ、宝物をらくだのこぶに載せて、役にも立たない民のところへ運ぶ。⁷ エジプトの助けは空しく、当てにならない。だから、わたしはこれを『何もしないラハブ』と呼ぶ。」

ユダの民がエジプトに下る時に、ネゲブという荒野を通ることになります。そして、ここに書かれている描写は、こんなに苦勞して、危険を冒していても、そして高価な代金を支払ったとしても、それでも助けは来ない、ということです。「ラハブ」というのは、エジプトの別名であり、また海の巨獣の名前でもありました。エジプトはその見た目のように豊かで、知恵があり、強い国のように見えるけれども、綿飴のように、何も無いのだということです。

私たちの周りにも、苦勞とお金ばかりかかるけれども、何ら達成しない知恵というものが沢山あ

ります。何だかの相談とか、専門知識と称するもの、いろいろないわゆる「常識」があります。けれども、多くの費用をかけた割には、何の効果も成果も表れなかったのです。

2C 預言に反抗する民 8-14

⁸「今、行って、彼らの前でこれを板に書き、書物にこれを記し、後の日のために永遠の証しとせよ。

⁹彼らは反逆の民、嘘つきの子ら、主のおしえを聞こうとしない子らだから。

主がなぜここで、「書物にこれを記し」なさいと言っているかということ、彼らが忘れるからです。「えっ？そんなこと聞きましたっけ？」と彼らは嘯きます。都合の悪いことは、私たちは忘れたとして嘯いてしまいます。

¹⁰ 彼らは予見者に『見るな』と言い、先見者にはこう言う。『われわれについて正しいことを幻で見るな。われわれに心地よいことを語り、だましごとを預言せよ。¹¹ 道から外れ、道筋からそれ、われわれの前から イスラエルの聖なる方を消せ。』

これら正しいこと、真実なことに、反発している民の姿です。自分に都合の良いこと、道が外れていてもよい、とにかく正しいことを語ってくれるな、と思っています。それは本質的に、聖なる主を消してくれと言っているのと同じです。同じことが、終わりの日に起こることをパウロはテモテに教えました。「2テモテ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にして行くような時代になるからです。」

¹² それゆえ、イスラエルの聖なる方はこう言われる。「あなたがたは、わたしの言うことを退けて、虐げと悪巧みに拠り頼み、これに頼った。¹³ それゆえ、このあなたがたの不義は、そそり立つ城壁に広がって 今にもそれを倒す裂け目のようになる。その倒壊は瞬く間に来る。¹⁴ その倒壊は、陶器師の壺が 容赦なく打ち砕かれるときのような。その破片の中には、炉から火を取り、水溜めから水を汲むかけらさえ見つからない。」

エジプトに頼ったために、そこには余計な労力と金銭が必要でした。結局しわ寄せがやって来て、住民に重税を課したり、何かを偽ってエジプトとの同盟を締結させようとしているのです。それが、「虐げと悪巧み」です。初めから何か悪いことをするわけではありません、けれども御霊に拠らないで肉に頼るときに、どこかで無理がきて目的を達成させるために手段を選ばなくなります。

すると、一気に落ちてしまいます。そびえ立つ城壁、また陶器師が打ち砕く破片のようになると言います。キリスト教団体の中でも、組織が大きくなって、その運営のために内部で不正が行われるということが実際に起こります。そうすると、せっかくこれまで築いた評判がその一つの事件で一

気に落ちてしまうのです。

3C 弱くされる民 15-17

¹⁵ イスラエルの聖なる方、神である主はこう言われた。「立ち返って落ち着いていれば、あなたがたは救われ、静かにして信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたはこれを望まなかった。

エジプトの助けを借りていく時の彼らの思いは、「恐れ」と「焦り」です。自分で何とかしなければやっていけないと思って、恐れ、焦っているのです。このように、「自分で何とかする」ということが、元凶であります。

そこでしなければいけないことは、「立ち返る」ことです。言い換えれば、悔い改めることですが、はっきりと思いを変える必要があります。心が向くその流れに乗っていくのではなく、半ば強制的にでも、今、していることを止めるのです。それが、「静かにする」ということです。私たちが、自分たちが何かをしている、ではなくて、主が何をしておられるのか、主が救いの働きをしておられるのだ、ということを静かにすることによって見えてきます。

¹⁶ あなたがたは言った。「いや、私たちは馬で逃げよう」と。そう言うなら、あなたがたは逃げてみよ。また、「私たちは早馬で」と言った。そう言うなら、あなたがたの追っ手はなお速い。¹⁷ 一人の脅しによって千人が逃げ、五人の脅しによってあなたがたは逃げる。ついには、残る者が山の頂の旗ざお、丘の上の旗のようになる。

恐れに対して、何かをすることによって対抗しようとするこのような結果になります。恐れていることが、本当にそうなってしまいます。そして、恐れというのは増幅します。実体以上の大きなものに見せてしまいます。それで、ユダの兵士たちはことごとくいなくなり、エルサレムには、山の頂の旗ざおのように、わずかしかいなくなるのです。

2B 恵みの注ぎを待つ方 18-24

¹⁸ それゆえ主は、あなたがたに恵みを与えようとして待ち、それゆえ、あわれみを与えようと立ち上げられる。主が義の神であるからだ。幸いなことよ、主を待ち望むすべての者は。

ここが、今晚の箇所の鍵となるみことばです。私たちは、本来、主を待ち望まないといけません。それで力を得て、知恵を得ます。ところが、私たちは愚かにも自分たちの知恵や、世の知恵に拠り頼みます。そうすると、主は、私たちが気づくところまで待っていてくださるのです。

自分たちが正しいことをしていると思い込んでいる時に、そのまま痛めつけられていくことになり

ます。主が正し方、義なる方で、この方の義の中で私たちが救ってくださることを知らないといけません。私たちは、自分たちに力尽き果てて、何もできない時になって初めて、主を呼び求めます。その時を待っておられるのです。自分が水に溺れている時に、そのもがく力がなくなれば、救命に来た人が助けることができないように、私たちが自分で何とかしようとする力がなくなると、主ご自身の救いが始まりません。

¹⁹ ああ、シオンの民、エルサレムに住む者。もうあなたは泣くことはない。あなたの叫ぶ声に応え、主は必ず恵みを与え、それを聞くとき、あなたに答えてくださる。²⁰ たとえ主があなたがたに 苦しみのパンと虚げの水を与えても、あなたを教える方はもう隠れることはなく、あなたの目はあなたを教える方を見続ける。²¹ あなたが右に行くにも左に行くにも、うしろから「これが道だ。これに歩め」と言うことばを、あなたの耳は聞く。

すばらしい恵みです。「シオンの民、エルサレムに住む者。」と主は呼ばれていますが、ヒゼキヤが、エルサレムの中で叫び求めています。心を注ぎだして、宮の中で涙を流して祈っています。その祈りに主が、恵みによって応えてくださったのです。エルサレムに住むというのは、「わたしが生きている中に住んでいる」ということでしょう。主がおられるところに留まっている者、ということです。そして、この恵みは一つに、自分の叫びに主が答えてくださるというものです。

そして、「あなたを教える方はもう隠れることはな」と言っています。これは、まぎれもなく主ご自身であり、御霊ご自身です。「ヨハネ 16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。」主に呼び求める時に、恵みによって祈りに応えられ、知恵をもって御霊は私たちを導いてくださいます。主が語られる声が聞こえるのです。それにしたがって、自分が歩むことができるようになります。

²² あなたは、銀をかぶせた刻んだ像と、金をかぶせた鋳物の像を汚れたものと見なし、不浄の物としてそれをまき散らし、これに「出て行け」と言う。

偶像というのは、私たちが主なる神ではなく自分の力や知恵に拠り頼んでいる時に、必ず心に持っているものです。主が命じられていることよりも、「私はこれを持っていますから」と言って、平然とその命令に従わないのが、偶像がすることです。ですから、私たちは心にたくさんに偶像を知らないうちに持っています。

²³ あなたが土地に蒔くあなたの種に 主は雨を降らせてくださる。それで、その土地の産する食物は みずみずしく豊かである。その日、あなたの家畜の群れは 広々とした牧場で草をはむ。²⁴ 土地を耕す牛やろばは、シャベルや熊手でふるい分けられた 味の良いまぐさを食べる。

主は、アッシリアを倒された後に、ユダの地を潤わせてくださいます。

そしてこの幻は、終わりの日に続きます。つまり、アッシリアがエルサレムを取り囲んで、彼らが滅ぼされることによって、主の民を救ってくださるよう、主は、終わりの日に諸国の軍隊がエルサレムを取り囲み、しかし主が来られて滅ぼしてくださいます。そして、主の土地には潤いが取り戻されるのです。

3B 敵に対する主の復讐 25-33

²⁵ 大いなる殺戮の日、やぐらの倒れる日に、高い山、そびえる丘の上すべてに、水の流れる運河ができる。

主が地上に再臨される時、その反対する勢力に主が戦ってくださいます。そして、主はエルサレムの山に住まわれます。そこに宮が立てられるからです。そして、その神殿から水が流れるのです。エゼキエルやゼカリヤが預言しました。

²⁶ 主がその民の傷を包み、その打たれた傷を癒やされる日に、月の光は太陽の光のようになり、太陽の光は七倍になって、七日分の光のようになる。

主は、彼らがこれまで受けてきた傷、自分たちの不従順によって受けた傷を癒して余りあるものとなっています。主は、このような働きを行ってくださいます。確かに罪を犯せばそれが傷となります。しかし、主はその罪を赦し、癒し、そしてあまりある恵みを降り注いでくださるのです。

²⁷ 見よ、主の御名が遠くから来る。立ち上る濃い煙とともに、怒りに燃えて。その唇は憤りに満ち、舌は焼き尽くす火のよう。²⁸ その息は、あふれて首まで達する流れのようだ。それは国々を破滅のふるいにかけて、諸国の民のあごに、迷い出させる手綱をかける。

主が天から勢いよく来られる姿です。口から、その息から怒りが現れることが書かれていますが、黙示録 19 章には、主が口から鋭い剣をもって諸国の軍隊をことごとく滅ぼされる幻があります。

²⁹ あなたがたには、聖なる祭りの祝いの夜のような歌があり、主の山、イスラエルの岩に行くために 笛に合わせて進む者のような、心の喜びがある。

主が敵を滅ぼされるのと同時に、ユダの民が喜んで、笛を奏でて主に歌い喜んでいます。主をほめたたえながら、そこには主が悪の勢力に対して戦ってくださっているということが分かります。黙示録において、地上に災いが下ると同時に天においては、大いなる神への賛美が繰り広げられています。「2テサロニケ 1:9-10 そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前

から、そして、その御力の栄光から退けられることになります。その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。」

³⁰ しかし、主は威厳ある御声を聞かせ、大雨、嵐、雹の石で、激しい怒りと、焼き尽くす火の炎とともに、下される御腕を見せる。³¹ 主の御声を聞いてアッシリアは打ちのめされる。主が杖でこれを打たれる。³² 主が下す懲らしめの杖がしなるたびに、タンバリンと豎琴が鳴らされる。主は武器を振り回して、これと戦う。³³ すでにトフェトも整えられ、実に王のためにも備えられている。それは深く、広がっていて、そこには火と多くの薪がある。主の息が硫黄の流れのように、それを燃やす。

主が終わりの日に行われることを、前兆のようにして、予型のようにして、今、差し迫っているアッシリアに対しても行なわれます。エルサレムを取り囲むアッシリア軍を主はたちまち滅ぼされます。そして王も滅ぼされます。しかし、センナケリブが何年も後に息子に殺されるので、ここに書かれているようにはなりません。これは、終わりの日の幻です。

「トフェテ」というのは、ヒノムの谷のことで、そこにごみの焼却がなされ、偶像礼拝の時にはそこで子供が火の中を通らされていました。イエス様はそこを「ゲヘナ」と呼ばれました。それから、死後に神の審判の後に投げ込まれる所が、ゲヘナと呼ばれるようになります。終わりの日には反キリストに対して主が戦われて、そして反キリストは火と硫黄の池に投げ込まれます。

2A 世の力 31

1B 速やかに助ける万軍の主 1-5

¹ ああ、助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬に頼り、数が多いといって戦車に、非常に強いといって騎兵に拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。

31 章も、30 章の始まりと同じように、「ああ」という言葉から始まっています。30 章では、彼らがエジプトにある知恵に期待していた部分を主が取り扱っておられましたが、31 章ではここにあるように馬や戦車に頼る、つまり肉の力、目に見える力に頼る部分を取り扱っています。ここは、絶えず旧約聖書から新約聖書に至るまで貫かれている主題です。ヨシュアたちが、わずかな人数でカナン王たちを倒しました。ギデオンもそうでした。そしてダビデはゴリヤテに対して、そうでした。数ある戦いは、主ご自身が戦ってくださっていることを物語っています。「詩 20:7 ある者は戦車がある者は馬を求め。しかし私たちは私たちの神【主】の御名を呼び求める。」

² しかし、主は知恵のある方。わざわざをもたらし、みことばを取り消さない。主は、悪を行う者の家と、不法を行う者を助ける者に対して立ち上がる。³ エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も肉であって霊ではない。主が御手を伸ばされると、助ける者はつまずき、助けられる者は倒れ

て、皆ともに滅び果てる。

目に見える力により頼むと、世に対するつまずきと共に、神の民も共につまずいてしまいます。

私たちは、目に見える力は肉眼で見えるので、それに力があって、目に見えないところに目を留めるのは意識しないとできません。ダニエル書 10 章には、ペルシアの君、ギリシアの君という存在が出てきます。ペルシア帝国、ギリシア帝国の背後に、墮落した天使が支配している力があつたということです。それだけ、霊的な勢力は強いということです。したがって、私たちが肉の武器に頼らずに、霊の武器に頼るように、何度も何度も言われていることなのです。「2コリント 10:4 私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。」

⁴ まことに、主は私にこう言われる。「獅子、あるいは若獅子が 獲物に向かって吼えるとき、たとえ大勢の牧者がそこに呼び集められても、獅子は彼らの声にひるむことなく、彼らの騒ぎにも動じない。そのように、万軍の主は下って来て、シオンの山とその丘の上で戦う。⁵ 万軍の主は、舞い飛ぶ鳥のように エルサレムを守る。これを守って救い出し、これを助けて解放する。」

主が、アッシリアを攻められる時をどのように行なわれるかを分かり易く描写しています。一夜にして 18 万 5 千人を滅ぼされるのですが、そのことを飛びかける鳥のように語られていきます。そして、世の終わりの時にも同じように、エルサレムを攻めてくる世界中の軍隊に対して、主は、行き来一発という時に、この町を速やかに守ってくださいます。ナルニア国物語に、「ライオンと魔女」があります。最後の戦いでは、まさにこれです。キリストを表すライオンが、魔女に対して速やかに襲いかかります。それで戦いが終わります。救い出し、人々を解放するのです。

2B 恵みによる悔い改め 6-9

⁶ 帰れ、イスラエルの子らよ。あなたがたが反抗を強めているその方のもとに。⁷ その日、イスラエルの子らは、それぞれ銀の偽りの神々や、金の偽りの神々を退ける。それらは、あなたがたが自分の手で自分のために造ったもので、そのことは罪過となっている。

再び悔い改めの呼びかけをしておられます。ここでは、「帰れ」という言葉を使っておられます。反逆によって遠く離れてしまったその心を主のもとに帰るようにせよということです。そして再び、偶像を捨てることを呼びかけています。自分の目に正しいと思うところに、自分に仕える神、偶像があります。

⁸ 「アッシリアは人のものでない剣に倒れ、人間のものでない剣が彼らを食い尽くす。アッシリアは剣の前から逃げ、若い男たちは苦役に服する。⁹ その岩は恐怖のために過ぎ去り、その首長たちも旗を捨て、おののき逃げ去る。 —シオンに火を持ち、エルサレムにかまどを持つ主のことば。」

31章はこのように、「人間ではない剣に倒れ」ということが強調されていることです。人間の力、目に見えるものではなく、目に見えない御霊の力です。それによって、アッシリアは必ず滅びるという約束です。このようにして、主は霊の戦いがあることを教えています。そして霊の戦いは、目に見える力や知恵ではなく、霊の武器に拠って戦うことを教えています。目に見える力や知恵は、いかに頼りにならないかを教えています。

そして、主を待ち望むことがいかに大切かを教えています。しかし、たとえ私たちが主を待たずに動いてしまっても、主の方が恵みを注ごうと、私たちが主に呼び求めているのを待っておられます。